

家督と方より初隱居以後は彼是政事向厚相談に  
有より辰中使石格別にて思召を以て任叙從二位大納  
言は辰中達以後こと沛意は  
右辰尾傳政辰中達御書付執前書相談

甲午十月十一日

上使

松平周防守  
水野勤範守

壬午十月廿八日

水戸教妻服女子賢姫祝姫西人是近虚弱に付弘弘不  
成成り而は帝丈夫と相成りる公違向辰中達と成  
を涉儀申出奉る由

十七

山里の花又安たまさむと云地のおとれ作とありてま  
の伝はる西の殿まうり作りぬおし海生の十日なれ夫  
其のけしきもうららかな物而もて高も庭よありまのむ  
女房こら何事と追ひまうせぬおこかと詠め侍りま  
花よりあを擧げ候みてるけしき一方なり

おあしむ那の女ふみせをよおは山里の本は希ききを  
と口すまみつ山よのわり若根とつていふぬとあつま  
もと何り侍りまし川一えきくよりるがし海出するはぬ  
るとも花のとよあるぬらあよかしとてかしはかすゆへ  
はけ侍りて

一五

ぬるくともなほにさらしや梅より粟よりなる花の下陰  
毎土元の基よのありもろよりうちをこもも又こころん

ちりそのまねい雪のよとあうちの木の北の方の色ふこもある  
まより後の山待ひおろきみれに山吹咲かたけけきこえい  
をい

山吹の花は梅より色をくそとみる枝の白き  
きわらうよ蕨いこもあへ生坐するよあとの花の  
いよとせざるしよおのれいおれい

朝庭をさかすはよふらあふ蕨とらふいよあはれあつし  
百つれたる晩はふとあふらうこひ花よあはれる斗もあつて柳

九

かこくも同い中室よまうりつりもの蕨折を敷き  
まよりい体みろふてあへおれとけうぬ時移也天この福  
めあふさうけれい

山吹くさあふまふら花を花ふあゆしおもとさうけり  
やうて西の殿よりくむとて

又やみむは山里のまはれを庭よあひく花の白雲  
右知恩院通親王西九に山登 柳吹上り急少一院の付の

山緑草也

六、  
一天午十月十九日休海國相川お焼を侍役不もお焼を